

# ヴィリエ・ド・リラダンにおける 反リアリズムと転説法

## —反リアリズム小説としての「クレール・ルノワール」

木 元 豊

### 0) 序論

1838年11月7日にブルターニュのサン・ブリュー（Saint-Brieuc）で生まれたオーギュスト・ド・ヴィリエ・ド・リラダン（Auguste de Villiers de l'Isle-Adam）は、1860年前後からパリで作家として活動し始める。1889年8月18日にパリで亡くなるまで作品を書き続けた彼の作家としての活動期間は、したがって、1850年に始まるリアリズム<sup>1)</sup>運動が、1857年出版の『ボヴァリー夫人』（*Madame Bovary*）を経て、ゾラの提唱する自然主義に継承されていく、フランスにおけるリアリズム・自然主義文学の全盛期と重なる。しかし、周知のように、ヴィリエ・ド・リラダンは決してリアリズム・自然主義の動きに与することはなかった。それどころか彼は、1880年代後半の自然主義に飽いた若い世代の作家たち、象徴派の作家たちにとって、リアリズム・自然主義に対する抵抗の鑑となっていた。たとえば、レミ・ド・グールモン（Remy de Gourmont, 1858-1915）はヴィリエのことを、「現実を調伏する祓魔師にして、理想を守る門の番人（l'exorciste du réel et le portier de l'idéal）<sup>2)</sup>」と名付けている。グールモンはまた、別の箇所で、ヴィリエをシャトープリアンと比較して、次のように述べる。

---

1) リアリズム（réalisme）は「写実主義」とも訳されるが、すでに多くの日本語による研究書、文学史概説書で「リアリズム」の語が用いられており、本論でもそれらに倣うこととする。なお、英語風には「リアリズム」である。

2) Remy de Gourmont, *Le Livre des masques*, Les Éditions 1900, 1987 [1896], p.60.

「一方 [=シャトープリアン] はわれわれを18世紀の取るに足らない文学から解放したが、他方 [=ヴィリエ] はわれわれから自然主義を一掃するのに非常に貢献した<sup>3)</sup>。」アンリ・ド・レニエ (Henri de Régnier, 1864-1936) も同様の役割をヴィリエに見ている。

ヴィリエは、同時代の実証主義的で写実主義的な精神 (l'esprit positiviste et réaliste de son temps) に対する、生ける異議申し立てであった。ある時期、フランスの思考をほとんど飲み込んでしまった自然主義の潮の中で、彼は波に抗って、標となるその岩塊をのぞかせる岩々のひとつであり続けた。彼はイデアリスム<sup>4)</sup>の代弁者のひとり (un des représentants de l'Idéalisme) だったのだ<sup>5)</sup>。

このように、象徴派の作家たちにとって、ヴィリエはリアリズム・自然主義文学に対する戦いの象徴であった。ところが、それにもかかわらず、反リアリズム・反自然主義という観点からのヴィリエ・ド・リラダンの作品の研究は、これまでほとんどなされていない。これにはいくつかの理由が考えられる。

上記の引用からもわかるように、ヴィリエにおける反リアリズム・反自然主義は、常に彼のイデアリスムの一側面とみなされてきた。そして、彼のイデアリスムとそれが象徴主義の作家たちに与えた影響については、これまで重要な研究の対象となってきた<sup>6)</sup>。ところが、イデアリスムの観点に立つと、ヴィリエにおけ

---

3) *Id., Promenades Littéraires. Quatrième série. Souvenirs du Symbolisme et autres études*, Mercure de France, 1927 [1920], p.71.

4) イデアリスム (idéalisme) は、哲学用語としては「観念論」、芸術・文学上の用語としては「理想主義」と訳されるが、本論においてはどちらの訳語をとっても不十分であり、あえて訳さずに「イデアリスム」とした。観念論と理想主義の双方の意味を含む語とする。

5) Henri de Régnier, *Portraits et Souvenirs*, Mercure de France, 1913, p.23.

6) たとえば、C.J.C. Van der Meulen, *L'Idéalisme de Villiers de l'Isle-Adam*, H.J. Paris, Amsterdam, 1925 ; A.W. Raitt, *Villiers de l'Isle-Adam et le mouvement symboliste*, Corti, 1965.

る反リアリズム・反自然主義は、反実証主義というイデオロギーに還元されるくらいがあった。たとえば、A・W・レイトはヴィリエのイデアリズムを、反実証主義、ヘーゲル哲学の影響、オカルティズム、幻覚主義 (illusionnisme) の四点から検討しているが、反リアリズム・反自然主義は取り立てて問題にしていない<sup>7)</sup>。彼の観点からは、反実証主義を検討すれば十分なのである。しかしながら、反リアリズム・反自然主義の提起する問題は、必ずしも反実証主義に還元されるものではない。リアリズム・自然主義はイデオロギー上の問題だけではなく、文学の形式、文学のあり方に関する問題でもあるからだ。

この点から、ヴィリエにおける反リアリズム・反自然主義が十分に検討されて来なかった、更なる理由が見えてくる。ヴィリエは、ボードレールやフロベール、マラルメやゾラといった作家たちと違って、文学の形式、文学のあり方に関する理論的著作、批評、書簡などをほとんど残していない。彼は美学上の議論や批評を贅言とみなしており、こうした問題に関してはきわめて寡黙なのである。こうしたヴィリエの態度から、たとえばA・W・レイトは、次のように結論する。「結局、ヴィリエは何よりもまず芸術の哲学的意味に関心があり、形式は彼にとって、(実践においてではないにせよ、理論においては) 二次的重要性しか持たないのである<sup>8)</sup>。」ということは、ヴィリエにおける反リアリズム・反自然主義は、結局、反実証主義に還元してよいということになる。そして、これまで多くの研究者が、多かれ少なかれこうした立場を共有してきたのではなからうか。しかしながら、『未来のイヴ』(*L'Ève future*, 1886) のある章に「いかに内容は形式とともに変わるか<sup>9)</sup>」という題名を当てるほどに文体に気を使うヴィリエが、文学上の形式を二次的問題とみなすということがあり得るだろうか。「形体は物質より

---

7) *Ibid.*, pp.163-264.

8) *Ibid.*, p.51.

9) Villiers de l'Isle-Adam, *L'Ève future*, Édition d'Alan Raitt, Gallimard, «Folio» 1993, p.80.

も肉体にとって本質的である<sup>10)</sup>」とはヴィリエがしばしば引く言葉ではなかったか。たしかにヴィリエは文学の形式面に関わる理論をほとんど残していない。しかし、だからこそ、彼の作品から形式への配慮を読み取るべきではないだろうか。

ヴィリエにおける反リアリズム・反自然主義が研究者の関心を引かなかったのには、もう一つ別の理由も考えられる。ヴィリエの作品はピエール＝ジョルジュ・カステックスの研究<sup>11)</sup>をはじめとして、幻想文学の観点から多くの研究がなされてきた<sup>12)</sup>。ところが、反リアリズム・反自然主義の観点は、幻想文学の観点と、幾分重なるのである。リアリズム・自然主義が「現実」を語ろうとする試みだからである。

とはいえ、反リアリズム・反自然主義の作品がすべて幻想文学の観点から読解可能とは言えない。ツヴェタン・トドロフは『幻想文学論序説』において、「幻想 (le fantastique)」を、語られる出来事が現実かどうかの判断に関する読者のためらいによって定義し、出来事が最終的に合理的に説明される場合を「怪奇 (l'étrange)」、出来事が超自然的に説明される場合を「驚異 (le merveilleux)」として、「幻想」というジャンルを、「怪奇」と「驚異」の二つのジャンルの境界例とした<sup>13)</sup>。フィリップ・アモンは、このトドロフの研究を参照しつつ、「現実」と「超自然」の対立を軸に、ひとつの空欄を指摘する<sup>14)</sup>。すなわち、「幻想」が

10) これは「ヴェラ」«Véra»のエピグラフである。同様の言葉は「クレール・ルノワール」«Claire Lenoir»でも用いられている。Villiers de l'Isle-Adam, *Œuvres complètes*, Édition établie par Alan Raitt et Pierre-Georges Castex avec la collaboration de Jean-Marie Bellefroid, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1986, tome I, p.553 et tome II, p.180 参照。以下、本書を O.C. と略す。

11) Pierre-Georges Castex, *Le Conte fantastique en France de Nodier à Maupassant*, Corti, 1987 [1951].

12) この観点からの最近の示唆に富む研究成果として、以下が挙げられる。Tuyoshi Aino, *Fantastique et description chez les symbolistes Villiers de l'Isle-Adam, Rodenbach, Gourmont, Schwob*, thèse de doctorat soutenue à l'Université Waseda en 2008, (<http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/34511/3/Honbun-4888.pdf>).

13) ツヴェタン・トドロフ、『幻想文学論序説』、三好育朗訳、東京創元社、創元ライブラリ、1999年、(Tzvetan Todorov, *Introduction à la littérature fantastique*, Seuil, 1970).

14) Philippe Hamon, «Un discours contraint», in R. Barthes, L. Bersani, Ph. Hamon, M. Riffaterre, I. Watt, *Littérature et réalité*, Seuil, «Points Essais», 1982, pp.126-127.

「現実と超自然の間のためらいの連続」にあるとすれば、「驚異」は「超自然が永続的に独占的」であり、「怪奇」は「超自然が合理的に説明されるもの」ということになり、「驚異」の対蹠点に、「現実が永続的に独占的」である場所が空くのである。この空欄を埋めるのが、アモンによれば、「リアリズムの言説 (le discours réaliste)」なのである。アモンのシステムに従えば、反リアリズムの言説は、まずは「驚異」のジャンルに属するものということになるが、リアリズムの言説ではないという点において、「幻想」および「怪奇」を内に含むとみなすことができる。したがって、少なくともこのシステムにおいては、反リアリズムは「幻想」より広い領野を得ることになる。トドロフのシステムに従った場合、ヴィリエの作品には、「幻想」に属するものよりも、「驚異」ないし「怪奇」に属するものの方が多いように思われ<sup>15)</sup>、そういう意味では反リアリズムという観点から論じる方が多くの作品を包括的に分析できるだろう。さらに、この観点からは、「驚異」、「怪奇」、「幻想」の3ジャンルの差異を問題にすることなく、ただ対リアリズム言説的に作品を論じることができるという長所もある<sup>16)</sup>。アモンによれば、リアリズムの言説は「規則づくめの言説 (un discours contraint)」なのだ。ということは、規則を少しでも破れば、リアリズムは崩れてしまうことになる。

こうして、反リアリズムという観点からヴィリエの作品を研究することの意味が明確になってくる。この観点からは、従来の反実証主義というイデオロギイ的観点からは把握できなかった、作品の形体、形式に関する問題を論じることができる。さらに、この観点からは、幻想文学という観点より広い領野を扱うことができ、しかも対リアリズム言説的に論じることが可能になる。これは19世紀後半の小説の主流をなすものがリアリズム言説であっただけに、ヴィリエの作品がそうした文学史上の一大潮流に対してどのような抵抗をしたのかを捉え、文学史

15) トドロフ自身、ヴィリエの「ヴェラ」を「驚異」の例として挙げている。前掲書、83-84ページ参照。トドロフによる「幻想」は、その定義からしてきわめて儂いものなので、厳密にその定義に当てはまる作品が少なくなるのは当然という見方でもできる。

16) もちろん、こうしたアプローチが有効な作品はリアリズム言説との境界に位置するものに限られるだろうけれど。

的に位置づけるのに有効である。この観点からは、まずどのようにしてヴィリエの作品がリアリズムの規範を逸脱するかを捉えればよいのだ。

ここで、改めて、本論で用いる「反リアリズム」という概念の定義をしておきたい<sup>17)</sup>。反リアリズムは、対リアリズム的に、リアリズムからの偏差によって実現する。したがって、反リアリズムの定義は、リアリズムの定義に依存することになる。本論では、古代から現代までの文学における現実描写を包含する、まさに「ミメシス」の問題に重なる意味、エーリッヒ・アウエルバッハが『ミメシス』で用いているような意味では、リアリズムの概念を用いない<sup>18)</sup>。本論では、あくまで19世紀後半を中心にフランスで形作られた、歴史的に限定された美学としてのリアリズムを問題とする。とはいえ、クールベ、シャンフルリ、デュランティらによる短命に終わったリアリズム運動にのみ限定するのではなく、フロベールを経て、ゴンクール兄弟、さらにはゾラへと受け継がれ、自然主義美学として形を変えたものもリアリズムに含めるものとする。『ラルース19世紀大百科事典』(1866-1876)の「リアリズム」の項では、自然主義の提唱者であるゾラもリアリズムの代表的な作家とみなされており、当時、リアリズムと自然主義はそれほど明確に区分されていなかったことが窺える。一方、ゾラは『自然主義の小説家たち』(*Les Romanciers naturalistes*, 1881)において、狭義のリアリズムの時代を超えて、バルザック、スタンダールに遡り、フロベール、ゴンクール兄弟、アルフォンス・ドーデを組み込む自然主義の小説家の系譜を提示しており、ゾラの観点からすれば、リアリズムは自然主義に包含されることになる。ヴィリエは、

17) 反リアリズムに関する先行研究としては、以下が存在する。中谷拓士、『反リアリズム論—ロブ=グリエをめぐって』、関西学院大学研究叢書第51編、創元社、昭和60年。

18) エーリッヒ・アウエルバッハ、『ミメシス ヨーロッパ文学における現実描写』、篠田一士、川村二郎訳、筑摩書房、ちくま学芸文庫、1994年、上下巻、(Erich Auerbach, *Mimesis. Dargestellte Wirklichkeit in der abendländischen Literatur*, 1946)。

作品中で「リアリズム」の語を何度か使用しているが<sup>19)</sup>、「自然主義」の語はおそらく用いていない。しかし、彼が自然主義に対する抵抗を体現していると象徴派の世代にみなされていたことは、最初に見たとおりである。したがって、本論では、特に区別の必要がない場合には、リアリズムに自然主義を含めて考える<sup>20)</sup>。本論で「リアリズム」と呼ぶのは、「日常生活を、実際の体験にもっとも近い形で、見聞きした事柄を源に、人生の真実に他ならない、平凡さを排除することなく表象しようとする<sup>21)</sup>」ことに重きを置く、19世紀フランス文学に顕著な傾向のことである。反リアリズムはこうした傾向に対する抵抗を表すものとひとまず規定できる。フィリップ・アモンによれば、リアリズムの言説は、情報を正確に伝えたいという教育的欲望に支えられており、そのためにコミュニケーションを乱す「雑音」を遠ざけ、明快さ (lisibilité) を保とうとする<sup>22)</sup>。とすれば、反リアリズムの言説は、何らかの方法によって、意図的にコミュニケーションを乱す「雑音」を挿入し、あえて平明な理解を阻むよう企てられたものと仮定できよう。本論では、ヴィリエのテキストが、そのような反リアリズムのテキストであることを論証していきたい。

とはいえ、本論でヴィリエのすべてのテキストを分析することは不可能だし、また、反リアリズムの戦略とみなし得るものすべてに焦点を当てることも不可能

19) たとえば、「死刑におけるリアリズム」(«Le Réalisme dans la peine de mort») というタイトルの時評が1885年に『フィガロ』紙に掲載され、死後出版の『過ぎ行く人々のもとで』(*Chez les passants*, 1889)に収録されている(O.C., II, pp.449-458)。また、リアリストを「人間精神の永遠の田舎者 (les éternels provinciaux de l'Esprit humain)」と断じた断片が発見されており、ブレイヤッド版全集に収められている (*Ibid.*, pp.998-999)。

20) リアリズムを巡る最近の研究書においても、バルザック、スタンダールからフロベール、ゾラ、さらには20世紀の作家の幾人かを含めたリアリズムの概念が提唱されている。たとえば、ジャック・デュボア、『現実を語る小説家たち バルザックからシムノンまで』、鈴木智之訳、法政大学出版局、叢書・ユニヴェルシタス835、2005年、(Jacques Dubois, *Les Romanciers du réel. De Balzac à Simenon*, Seuil, 2000) ; Philippe Dufour, *Le Réalisme. De Balzac à Proust*, Presses Universitaires de France, 1998 ; Henri Mitterrand, *L'illusion réaliste. De Balzac à Aragon*, Presses Universitaires de France, 1994 など。

21) Pierre Dufour, *op.cit.*, p.1.

22) Philippe Hamon, *op.cit.*, pp.133-134.

である。それゆえ、本論ではヴィリエ初の短編小説である「クレール・ルノワール」(«Claire Lenoir»)を取り上げ、本作品が反リアリズム小説であること、また、「クレール・ルノワール」が反リアリズム小説として成立するに際して、「転説法 (métalepse)」と呼ばれる語りの違反が重要な働きをしていることを論証したい。

本論が特に「クレール・ルノワール」を分析対象とするのには理由がある。先にも触れたように、本作品はヴィリエが執筆した最初の短編小説であり<sup>23)</sup>、またエドガー・アラン・ポーの強い影響下に書かれた作品であり、さらにヴィリエ初の風刺小説でもあって、それまでのロマン主義の影響を強く受けた作風を脱して、独自の作風を確立した、ヴィリエのキャリアにおいてエポック・メイキングな作品である。詩人、劇作家として出発しつつも、作品の大半を短編小説が占めるヴィリエの文学の、真の出発点とみなしてよい。したがって、反リアリズムの観点からヴィリエ文学全体を視野に取る場合、「クレール・ルノワール」はまずはじめに分析しなくてはならない作品なのである。

一方、転説法はジェラルド・ジュネットが『物語のディスクール』において、修辞学概念をナラトロジーに応用したものである<sup>24)</sup>。本概念の詳細に関しては、「クレール・ルノワール」を分析していく過程で明らかにしていきたい。

本論はまず「クレール・ルノワール」がリアリズム小説の一種のパロディ、「偽リアリズム小説」であることを明らかにした上で、これが「反リアリズム小説」に変貌する仕組みを解明する。

23) 「クレール・ルノワール」は、その長さからすれば「中編小説」(nouvelle)ともみなせる作品であるが、ヴィリエの後の作品の出発点として、「短編小説」(conte)として扱われることがしばしばある。Cf. Villiers de l'Isle-Adam, *Les Trois Premiers Contes : «Claire Lenoir», «L'Intersigne», «L'Annonciateur»*, Édition critique par É. Drougard, Publication de la faculté des lettres d'Algers, Presses Universitaires de France, [1931], 2 tomes (以下、*L.T.P.C.*と略す)。多くの場合、文脈に応じて、「中編小説」(nouvelle)とも、「短編小説」(conte)とも形容されている。

24) ジェラルド・ジュネット、『物語のディスクール 方法論の試み』、花輪光、和泉涼一訳、書肆・風の薔薇、1985年、274-278ページ、(Gérard Genette, «Discours du récit», in *Figures III*, Seuil, «Poétique», 1972, pp.243-251)。



## 1) 偽リアリズム小説としての「クレール・ルノワール」

### 1-1) 「クレール・ルノワール」の成立の過程と二つのバージョン

「クレール・ルノワール」の分析を始めるにあたって、まずは本作品の執筆、出版の経緯について確認しておきたい。まずは詩人として立ったヴィリエは1859年に『初期詩集』(*Les Premières poésies*)を出版した後、ヘーゲル哲学の影響を受けた長編哲学小説『イシス』(*Isis*)に着手するが、この作品は1862年に第一巻が出版されたのみで、未完に終わる。劇作家としての成功を目指すヴィリエは、ロマン主義演劇の影響の色濃い『エレン』(*Elén*)と『モルガーヌ』(*Morgane*)の二作品を、それぞれ1865年と1866年に非売品として少数出版するが、両作品とも上演にはこぎ着けなかった。これらに続く作品が「クレール・ルノワール」ということになる。

「クレール・ルノワール」には二つのバージョンが存在する。ヴィリエがアルマン・グージュヤン (Armand Gouzien) と創刊し、編集長を務めた週刊誌『文学と芸術誌』(*Revue des lettres et des arts*, 1867-1868)に、創刊号に当たる1867年10月13日号から同年12月1日号まで連載された1867年版と、それから20年後の1887年に、トリビュラ・ボノメ (Tribulat Bonhomet) という登場人物を主人公とする作品を収録した小説集『トリビュラ・ボノメ』(*Tribulat Bonhomet*)に収められた1887年版である。まずは1867年版について、その成立の過程を確認したい。

ヴィリエは1866年にはすでに「クレール・ルノワール」を構想していたと考えられている。1866年9月11日の消印のあるマラルメ宛書簡で、ヴィリエが「クレール・ルノワール」に触れて、「完成した小説 (un roman terminé)」と述べているからである<sup>25)</sup>。「クレール・ルノワール」が1867年版の形ですでにこの

---

25) Villiers de l'Isle-Adam, *Correspondance générale*, Édition recueillie, classée et présentée par Joseph Bollery, Mercure de France, 1962, I, pp.98-101, (以下、C.G. と略す)。

時期に完成されていたとは一般に考えられていないが<sup>26)</sup>、この書簡からは本作品の構想に関するいくつかの貴重な情報が得られる。まず、「クレール・ルノワール」がポーの美学に基づく恐怖小説であること。つぎに、この作品がグロテスクで滑稽な側面を持っており、作者自身にとっても自分の新たな才能の発見となったこと。最後に、本作品がブルジョワ風刺のプログラムに属していること。この最後の点は、本論にとって特に重要なので、書簡の文面を引用しておこう。

私はブルジョワを、[…]、ヴォルテールが「教権支持者」を、ルソーが貴族を、モリエールが医者を買ったように、扱ってやろうと思っています。[…]  
比べてみれば、ドーミエさえも、彼ら [=ブルジョワ] に卑屈にへつらっているようだと言われました。もちろん、私は、彼らを愛しているふり、天の高みにまで持ち上げるふりをして、鶏のように殺してやります。ポノメ、フィナシエ、ルフォルといった人物をお目にかけてみましょう。私は彼らを熱愛しており、心遣いを尽くして彫琢してやります。要するに、私は鎧の合わせ目 (le défaut de la cuirasse) を見つけたのです。そして、それは思いがけないものとなるでしょう<sup>27)</sup>。

引用中のポノメとは、「クレール・ルノワール」の語り手兼主人公となる登場人物である。この引用からわかることは、「クレール・ルノワール」が偽装戦略に基づく小説だということである。ブルジョワを攻撃するために、ブルジョワを「愛しているふり」をするという戦略、敵に好まれるような体裁で、相手の懐深くに忍び込み、とどめを刺すという戦略である。ヴィリエが「鎧の合わせ目」を発見したと言っていることにも注意しよう。「鎧」ということは、敵、すなわちブルジョワは、しっかりと身を守っていて、通常の攻撃では倒せないということである。しかし、この「鎧」にも「合わせ目」、すなわち隙があって、そこを突けば、相手にとって意外の攻撃となるということである。「クレール・ルノワール

---

26) Cf. *O.C.*, II, p.1142.

27) *C.G.*, I, p.99.

ル」ははじめから、攻撃のための書物として構想されているのだ。

では、攻撃の対象は誰だろうか。先の引用から明確なのは、それがブルジョワだということである。そして、「クレール・ルノワール」の主人公であるトリビュラ・ボノメがブルジョワを体現していることは周知の事実である。したがって、「クレール・ルノワール」の攻撃対象は、その語り手兼主人公であるということに、まずはなる。しかし、ヴィリエにとっては、本当の敵はボノメの背後にいるようである。1867年9月27日の消印のあるマラルメ宛書簡で、明確な言及はないが、まず間違いなく創刊したばかりの『文学と芸術誌』について語りながら、ヴィリエは次のように述べている。

ご存知のとおり、いくつか予約講読が取れたらすぐに、読者を逆上させる必要があります (il faudra affoler le lecteur)、[…。購読者の誰かを、ビセートル (Bicêtre) に送ることができたら、何という勝利でしょう！マラルメよ、まさしく芸術の極みではないですか、崇高ではないですか！—私たちのことを忘れられないことでしょうか。あなたも私と同様に、抑え難い欲求を感じているはずです。それに、創刊号からすぐに、私があなたの傍らで働くのに値しなくはないとおわかりになりますよ。そうなのです、私はついにブルジョワの心をつかむ手段を見つけたとうぬぼれているのです。私はブルジョワをよりじっくり時間をかけて、より確実に殺害するために、自らブルジョワになり切ったのです (Je l'ai incarné pour l'assassiner plus à loisir et plus sûrement)<sup>28)</sup>。

ヴィリエの本当の敵は読者なのである。引用中、「読者を逆上させる」と述べている箇所の「逆上させる (affoler)」という語は、語源的には「発狂させる」ということであり、「ビセートル」は男性の精神病患者が収容されたビセートル病院を指すものと思われる。ヴィリエにとって、自らが編集長に収まった週刊誌

---

28) *Ibid.*, p.113. 傍点部は原文ではイタリック体。

『文学と芸術誌』の真のねらいは、主たる購読者であるブルジョワを攻撃することであり、「クレール・ルノワール」こそ、この攻撃の手段なのである。本小説は、『文学と芸術誌』のまさに「創刊号から」、常に巻頭掲載で、連載されることになるのだから。

「クレール・ルノワール」は、先に触れたように、『文学と芸術誌』に1867年10月13日から同年12月1日まで、8回に渡って、中断なく連載された。1867年11月21日付けのゴンクール兄弟宛のヴィリエの書簡から、ヴィリエが、雑誌の編集長としての仕事の合間に、連載に合わせて「クレール・ルノワール」を執筆していったことがわかっている<sup>29)</sup>。

『文学と芸術誌』は表紙には、タイトル、編集長 (rédacteur en chef) であるヴィリエの名、社長 (directeur) であるアルマン・ゲージャンの名が、順に明記され、スローガンである「考えさせる (Faire penser)」が掲げられている<sup>30)</sup>。「クレール・ルノワール」は常に巻頭に掲載されている。目次には作者がヴィリエ・ド・リラダンであることが明記されているが、作品の冒頭では題名の下に、副題があって、これが「トリビュラ・ボノメ医師の覚書」(«Mémorandum du docteur Tribulat Bonhomet») であることが示されている。この副題に関しては後に詳しく検討する。さらに、「陰鬱な物語」(«Histoires moroses») というわき見出しが、題名の上に題名より大きく掲げられている。このわき見出しは、「クレール・ルノワール」の連載終了後、『文学と芸術誌』の1867年12月29日号および1868年1月5日号と12日号に掲載されたヴィリエの短編小説「予兆」(«L'Inter-signe») と、共通である。各回の最終ページには作者ヴィリエ・ド・リラダンの名が明記されている。この複雑なタイトル構成は注目に値する。これは「クレール・ルノワール」の二重の帰属を示唆しているものと考えられる。本作品は「陰鬱な物語」の一編としてはヴィリエに帰属し、「覚書」としては語り手兼主人公のトリビュラ・ボノメに帰属しているのである。「クレール・ルノワール」はヴィリエの作品であると同時に、ボノメの作品として読解されねばならないというこ

29) *Ibid.*, p.117.

30) 『文学と芸術誌』は全号、内容を Gallica (gallica.bnf.fr) で確認できる。

とだ。

「クレール・ルノワール」の内容を考察する前に、1887年版の成立に関して、主な経緯を確認しておこう。「クレール・ルノワール」が初版から20年後の1887年になって小説集『トリビュラ・ボノメ』の一編として出版されることになったのは、1884年に出版されたジョリス＝カルル・ユイスマンス (Joris-Karl Huysmans, 1848-1907) の『さかしま』(*À Rebours*) に、主人公デゼッサントの愛蔵書として「クレール・ルノワール」が取り上げられ、その宣伝効果を利用しようとしたためではないかと考えられている<sup>31)</sup>。この当時、『文学と芸術誌』版の「クレール・ルノワール」はすでに稀覯本となっていたらしい。1880年代後半には、若い世代の作家たちがヴィリエを師と仰ぐようになっており、1886年12月号の『独立評論』(*La Revue indépendante*) に、テオドール・ド・ヴィズヴェ (Theodor de Wyzewa, 1862-1917) がヴィリエに関する長い批評記事を寄せて、「クレール・ルノワール」にも言及している<sup>32)</sup>。また、ヴィリエ自身、自分が生み出したブルジョワの権化、トリビュラ・ボノメという登場人物に魅せられていて、1867年以降もしばしば自ら演じたり、新たなエピソードを語ったりして、ヴィリエの友人たちの間では有名になっていたようである<sup>33)</sup>。そういう訳で、ヴィリエはトリビュラ・ボノメを主人公とした短編小説を何編か新たに作成し、それらと「クレール・ルノワール」を合わせて、小説集を刊行することとなった。『トリビュラ・ボノメ』に収められた作品は、順に、「白鳥を殺す男」(«Le Tueur de cygnes»、「地震の利用に関するトリビュラ・ボノメ医師の動議」(«Motion du docteur Tribulat Bonhomet touchant l'utilisation des tremblements de terre»、「日和見主義者たちの饗宴」(«Le Banquet des Éventualistes»、「クレール・ルノワール」、そして、エピローグとして、「トリビュラ・ボノメ医師の驚異的な幻覚」(«Les Visions merveilleuses du docteur Tribulat Bonhomet») である。

31) Cf. O.C., II, pp.1144-1145 et Alan Raitt, *Villiers de l'Isle-Adam exorciste du réel*, Corti, 1987, p.272.

32) Teodor de Wyzewa, «Le comte de Villiers de l'Isle-Adam, notes», *La Revue indépendante*, le décembre 1866 (T1.N2, pp.260-290) .

33) Cf. O.C., II, pp.1143-1144.

小説集『トリビュラ・ボノメ』に「クレール・ルノワール」を収めるにあたって、ヴィリエは1867年版の全面的な改稿を行っている。その修正の細部に関してはここでは取り上げないが<sup>34)</sup>、一点、おそらくこれまで指摘されていないことを、問題にしておきたい。それは、1867年版と1887年版とでは、想定されている読者が異なるということである。1867年版では、先に見たように、作者ヴィリエが敵視するブルジョワが読者として想定されていた。一方、1887年版では、誰よりもまず、すでにトリビュラ・ボノメという登場人物の存在をよく知っており、彼にまつわる物語を読みたがっているヴィリエの友人たちが、読者として想定されていたはずである。このことは、『トリビュラ・ボノメ』の「はしがき (Avis au lecteur)」に収められた以下の一文からも理解できるだろう。

われわれにはそれを危惧する十分な根拠があるのだが、もしこの（稀なほどに、議論の余地のない）登場人物 [=トリビュラ・ボノメ] が何らかの人氣を勝ち得たなら、われわれは、近いうちに、遺憾ながら、彼が主人公の逸話集と彼の作になる警句集を出版することになろう<sup>35)</sup>。

ヴィリエはすでにボノメの人氣に関してある程度確信を持っているから、このような言い方ができるのである。巻頭作である「白鳥を殺す男」では、ボノメはのっけから「われわれの高名な友人 (notre illustre ami)」と形容されている<sup>36)</sup>。すなわち、すでにボノメという人物を知っている人々が、読者として想定されているのである。

この違いから、1867年版と1887年版の「クレール・ルノワール」には、微妙だが、大きな違いが生じていると考えられる。1867年版では、読者がボノメの意見とヴィリエ自身の意見とを混同する可能性を、常に想定する必要があったは

34) 修正の詳細に関しては、以下を参照。L.T.P.C., I, pp.9-163 et O.C., II, pp.1149-1150.

35) *Ibid.*, p.131. ゴシック体の語は、原文では、小キャピタル。

36) *Ibid.*, p.133.

ずだが、1887年版では、作者は自分の立場を危険にさらすことをあまり案じることなく、ボノメに語らせることができるようになったはずなのである<sup>37)</sup>。この違いは後の分析において、再び問題としたい。

## 1-2) 「クレール・ルノワール」における偽リアリズム

1867年版と1887年版の「クレール・ルノワール」には様々な違いがあるが、物語の大きな流れには変化がない。今後は、特に本論にとって重要な異同がない限り、原則として1887年版に基づいて分析を進めたい。

まず、物語内容を簡単に見ておこう。物語はトリビュラ・ボノメによって、一人称で語られる。G・ジュネットの用語で言えば、ボノメは「等質物語世界的語り手 (narrateur homodiégétique)」ということになる。物語は、まず第1章でボノメが自らの人となりを読者に紹介してから始まる。1866年、ジャージー島からブルターニュのサン・マロへ向かう船の中で、ボノメはヘンリー・クリフトンという若い英国人航海士と知り合い、この航海士が目の悪い既婚女性に恋をしていることを知る。クリフトンの話は、ボノメに、友人のセゼール・ルノワール医師の夫人である、クレールの目のことを思い起こさせる。ボノメはサン・マロで、まさにルノワール家を訪問する予定だったのだ。翌日、サン・マロ到着後、ボノメはカフェで、屠殺場で殺される動物の目の網膜には、死の直前に見たものの残像が、写真のように残されているということを伝える新聞記事を読む。ルノワール家に着いたボノメはクレールの目がたいへん悪くなっていることを確認する。ボノメは夕食の準備が整うまで、世界を股に掛けた自分の冒険を、夫婦に語って聞かせる。夕食時には、ボノメとクレールが音楽と文学を語り合う。二人の意見は見事に食い違う。食後は、セゼールが口火を切る形で、死後の生、幻影の实在性、現実とは何かを巡る哲学的議論が交わされる。実証主義者のボノメに

---

37) 1887年版「クレール・ルノワール」からは、1867年版に存在した「陰鬱な物語」というわき見出しがなくなっているが、これは1887年版「クレール・ルノワール」が、『トリビュラ・ボノメ』というより大きな物語に組み込まれた以上、当然の帰結だろう。

対して、セゼールはヘーゲル哲学の信奉者であり、同時に黒魔術も信じている。一方、クレールは信仰に生きるキリスト教徒である。ポノメは議論で徹底的にやり込められる。最終的にその晩の会話は、死後の復讐に関するセゼールの謎めいた言葉で締め括られる。十日ほど後、セゼールは急死する。彼の喫煙癖を治そうとポノメがひそかに同毒療法を用いた結果、死んでしまったのである。セゼールは死の直前に、ポノメの耳元で、姦通と死後の復讐に関する謎めいた言葉をつぶやく。クレールとともにセゼールの通夜をしていたポノメは、言い知れぬ恐怖を感じて、部屋を逃げ出し、そのままルノワール家を離れてしまう。一年後、南仏のディーニュにいたポノメは、ホテルでイギリスの文通相手から手紙を受け取る。その追伸で、ヘンリー・クリフトンがオセアニアの島で、オティゾールと呼ばれる謎めいた土着民<sup>38)</sup>に首を切られて、殺されたことを知る。手紙を読み終えたところで、隣室からポノメを呼ぶ声が聴こえるが、それは一年で老女のように衰えてしまったクレール・ルノワールであった。彼女はポノメに伝えるべきことがあって、ずっと後を追っていたのだ。ちょうどセゼールの一周忌だった。彼女は自分が一度だけ、夫の留守中にヘンリー・クリフトンと姦通の罪を犯してしまったことを告げ、夫の死後に見た夢の話をする。夢にセゼールは南洋の土着民の姿で現れるという。ポノメの目の前で、末期の発作がクレールを襲い、クレールは何か恐ろしい幻影を見て、息を引き取る。ポノメがクレールの目を検眼鏡で調べたところ、網膜にははっきりとセゼール・ルノワールの面影のある南洋の土着民が、切り取ったばかりのヘンリー・クリフトンの生首を、高々と掲げている姿が映っていた。

よく指摘されるように、この物語の結末において、感覚的に把握できるものしか「現実」と認めない実証主義者トリビュラ・ポノメは、まさに実証科学の手段と方法によって、幻影の実在性を確認することになってしまう。クレールの目の網膜に残っていた映像は、クレールが見た幻影が物質的に存在したことを意味するが、ポノメが信じる実証科学では、そのことを確認できても、合理的に説明す

38) 原文では «indigène» である。作者ヴィリエの人種的偏見を反映した用語であり、原文に忠実であるために、訳語も差別的にならざるを得なかった。お許し願いたい。



ることは不可能である。したがって、ボノメの観点に立てば、説明不能な超自然的現象が存在することになる。そういう意味で、この物語はトドロフの分類では「驚異」のジャンルに属する。しかし、セゼール・ルノワールの立場からすれば、「幻影の实在性」は合理的に説明可能である。彼が生前に、ヘーゲル哲学にオカルティズムを接ぎ木した独自のイデアリズムに基づいて証明しようとしたことは、まさにこのことである。したがって、セゼールの観点に立てば、超自然的現象は合理的に説明されることになる。とすれば、この物語は「怪奇」のジャンルに属しているとも考えられる。もし読者が、ボノメの立場とセゼールの立場のどちらを取るかで迷うとすれば、そういう意味において、この物語は、トドロフの定義による「幻想」のジャンルに属しているとみなすことも不可能とは言えないだろう。しかし、本論において重要なのは、この物語が「驚異」、「怪奇」、「幻想」のいずれのジャンルに属するのかを決定することではなくて、むしろこれが対リアリスティックな物語、すなわちリアリズムを強く意識した物語であることを確認することである。

先に確認したように、「クレール・ルノワール」ははじめから偽装戦略に基づいて構想されていた。ヴィリエは、自らの敵である、ブルジョワで、実証主義者のトリビュラ・ボノメのふりをして、物語を語ることにした。そして、1867年に想定されていた読者は、先に見たように、ブルジョワ、すなわちヴィリエの敵であった。換言すれば、ヴィリエは、読者の息の根を止めるために、読者の同輩であるボノメとして、読者の懐に忍び込むことにしたということである。これこそ、「私はついにブルジョワの心をつかむ手段を見つけたとうぬぼれているのです (je me flatte d'avoir enfin trouvé le chemin de son cœur, au bourgeois)」と、ヴィリエが、先に引用したマラルメ宛書簡で、述べていることだろう<sup>39)</sup>。では、読者であるブルジョワの心をつかむ物語とは、どういう物語だろうか。読者が、語り手である実証主義者ボノメの同輩であるとすれば、それはリアリズム小説ではなだろうか。Ph・デュフルが述べているように、「第二帝政期 [1852-1870]

39) 前節引用の1867年9月27日の消印のあるマラルメ宛書簡 (C.G., I, p.113) 参照。

に、その後の論争を構造化する一連の対立が、最終的に定まった。すなわち、一方に、リアリズム、唯物論、実証主義 (réalisme, matérialisme, positivisme)、他方にイデアリズム、空想力、想像力 (idéalisme, fantaisie, imagination)<sup>40)</sup> なのだから。以下、詳しく検討してみよう。

まず、「クレール・ルノワール」(«Claire Lenoir») というタイトルであるが、これはそれまでヴィリエが出版した作品、長編小説『イシス』(*Isis*, 1862)、戯曲『エレン』(*Elèn*, 1865)、戯曲『モルガーヌ』(*Morgane*, 1866) と比べると、いずれも女性登場人物の名、あるいは女性登場人物に関係する名を掲げているという点では共通しているが、大きな違いもある。「イシス」は言うまでもなくエジプトの女神を示し、はっきりと神話的な題名である。「エレン」は、まず、その特殊な綴りが異国情緒を喚起すると同時に、フランス語では音が同じになる、スパルタのヘレネ (Hélène) を想起させる<sup>41)</sup>。「モルガーヌ」は、アーサー王物語に登場する妖精モルガーヌ (la fée Morgane) を思わせる。いずれもこのように神話的な名前がタイトルとなっているのに対して、「クレール・ルノワール」は光と闇を暗示する名前とはいえ、フランスのブルジョワ女性の名前として十分存在し得る。「クレール・ルノワール」が姓名揃っているのに対して、「エレン」と「モルガーヌ」は名だけがタイトルになっているという違いもある。『イシス』の第一巻「トゥッリア・ファブリアーナ」(«Tullia Fabriana») は女性登場人物の姓名をタイトルとしているが、これと比べても「クレール・ルノワール」の平凡さは際立つ。一方、ゴンクール兄弟 (Edmond de Goncourt, 1822-1896 et Jules de Goncourt, 1830-1870) の『ルネ・モーブラン』(*Renée Mauperin*, 1864)、『ジェルミニ・ラセルトゥー』(*Germinie Lacerteux*, 1865)、『マネット・サロモン』(*Manette Salomon*, 1867) やエミール・ゾラ (Émile Zola, 1840-1902) の『テレーズ・ラカン』(*Thérèse Raquin*, 1867) など、当時のリアリズム小説と比

40) Philippe Dufour, *op.cit.*, p.5.

41) ヴィリエは1866年に『現代高踏派詩集』(*Le Parnasse contemporain*) に掲載した「エレヌ」«Hélène」という詩を、同じく1866年に出版した『エレン』の第2巻の巻頭に、「エレンに」«À Elèn」という題で再録しており (O.C., I, p.1334)、ヴィリエの中でElènとHélèneは結びついていたと思われる。

べてみると、「クレール・ルノワール」は違和感のないタイトルである。このように、本作品はすでにタイトルから、リアリズム小説に紛れ込むように仕組まれているのである。

「クレール・ルノワール」に付けられた副題はさらに興味深い。訳出すると、以下のとおりである。

数々のアカデミーの名誉会員にして、教授資格を有する生理学博士であるトリビュラ・ポノメ医師による、慎み深く、科学的な人物であるクレール・ルノワール未亡人の不可思議な症例に関する覚書<sup>42)</sup>

「覚書」は原語では *Mémorandum* であり、元々は外交用語である特殊な語彙である。ここでは、ラテン語風の言い回しが与える術学的な印象の故に用いられているのであろう。いずれにせよ、この副題が意味するのは、「クレール・ルノワール」が絵空事などではなく、医師にして、生理学博士である人物による、ある女性の症例に関する、「まじめな」報告書だ、ということである。小説と医学・生理学的症例研究が重ね合わせられている点はゾラの自然主義を思わせるが、ゾラの自然主義宣言である『テレーズ・ラカン』の「序文」は1868年出版の第二版に付けられたもので、「クレール・ルノワール」には影響しない<sup>43)</sup>。しかし、ゴンクール兄弟による自然主義文学宣言とみなされる『ジェルミニエー・ラセルトゥー』の「序文」を、ヴィリエが意識していた可能性はかなりある。ゴンクール兄弟の

---

42) O.C., II, p.145.

43) とはいえ、ヴィリエが「クレール・ルノワール」の連載時に『テレーズ・ラカン』を読んでいた可能性はある。前者は1867年10月13日から同年12月1日まで連載されたが、後者は『ある恋愛結婚』(*Un mariage d'amour*)のタイトルで、アルセーヌ・ウッセー (Arsène Houssaye) の『芸術家』誌 (*L'Artiste*) の1867年8月号、9月号、10月号に掲載されていたからである (Cf. Émile Zola, *Thérèse Raquin*, Chronologie et introduction par Henri Mitterand, GF-Flammarion, 1970)。アルセーヌ・ウッセーは当時ヴィリエと交流があったようで、『文学と芸術誌』(第12号、1867年12月29日)にも寄稿しているし、逆にヴィリエは1868年4月1日の『芸術家』誌に詩を寄せている (Cf. Alan Raitt, *op.cit.*, p.87)。

『日記』(Journal)によれば、ヴィリエは兄弟と1864年には知り合っている<sup>44)</sup>。『日記』の記述から判断するに兄弟はヴィリエをあまり評価していなかったようだが、『文学と芸術誌』を創刊するにあたって、ヴィリエは1867年9月25日付けの書簡で、兄弟に寄稿を依頼して、ゴンクール兄弟の『観念と感覚』(*Idées et Sensations*, 1866)にも言及している<sup>45)</sup>。同年11月21日には、ヴィリエは書簡でゴンクール兄弟に原稿を催促している<sup>46)</sup>。この書簡では、ヴィリエは自分が執筆中の「クレール・ルノワール」に触れているのみならず、出版されたばかりの『マネット・サロモン』の、とりわけ文体を賞賛し、忙しさが一段落したら書評を書きたいと申し出ている。この書評は現在のところ発見されておらず、口約束に終わったものと考えられる。一方、ゴンクール兄弟は『文学と芸術誌』第23号、1868年3月15日に、「私が好む家」(«La Maison que j'aime»)という小品を寄せている。ヴィリエがゴンクール兄弟に敬意を払っていたのは間違いなく、彼が『ジェルミニー・ラセルトゥー』を読んでいなかったとは考えにくい。とすれば、「クレール・ルノワール」の副題に見られる医学、生理学と文学との合致は、『ジェルミニー・ラセルトゥー』の「序文」から着想された可能性が高いと思われる。この点は後に再び問題にしたい。

物語の展開する時と場所、登場人物の類型を見ても、「クレール・ルノワール」はそれまでのヴィリエの作品より、ずっとリアリズム小説の方に近い。未完に終わった長編小説『イシス』の舞台は1788年のイタリアで、漠然とナポリ王位篡奪計画が問題となっている<sup>47)</sup>。主要登場人物はトゥッリア・ファブリアーナ女男爵と若き大公ヴィルヘルム・ド・シュトラリ＝ダントス(Wilhelm de Strally-d'Anthas)である。戯曲『エレン』はドレスデンで展開するが、このことにはお

44) ヴィリエは1864年9月12日に、ゴンクール兄弟の『日記』に初めて登場する(Edmond et Jules de Goncourt, *Journal. Mémoire de la vie littéraire*, Laffont, «Bouquins», 1989, I, pp.1097-1098)。

45) C.G., I, pp.109-110.

46) *Ibid.*, p.117.

47) O.C., I, pp.99-199.

そらく異国趣味以上の意味はない<sup>48)</sup>。時代は特定されていない。学生たちの代表であるサミュエル・ヴィスラー (Samuel Wissler) がエレンという娼婦的な女性に誘惑され、指導者としての能力を失うことを骨子とする観念的な劇である。主要登場人物はみな貴族である。戯曲『モルガース』では、『イシス』と同様に、18世紀末のイタリアが舞台で、両シチリア王国の王位篡奪計画が問題となっている<sup>49)</sup>。モルガース・ド・ポレアストロ女公爵は恋人のセルジウス・ダルバマー (Sergius d'Albamah) を擁立して、王位篡奪に一旦は成功するも、誤解に基づく嫉妬のために、自ら計画を破壊してしまう。このように「クレール・ルノワール」以前の作品においては、同時代のフランスが問題になることがなかったし、登場人物も特別な名前を持つ貴族が中心であった。それに対して「クレール・ルノワール」では、同時代のフランスが問題となっている。物語の始まりは「1866年7月の末頃<sup>50)</sup>」であり、まさに「クレール・ルノワール」連載開始の一年程前である。物語の後半は、始まりから約一年後のことであるから、ちょうど連載開始の時期と重なることになる。物語の舞台も、まずはジャージー島からサン・マロへ向かうイギリスの商船内、つぎにサン・マロとその市街にあるルノワール家、後半は南仏のディーニュのホテルである。パリは舞台にならないものの、1867年の読者にとって、「今、ここ」が問題になっているという印象は強かったはずである。主要登場人物も、イギリス人で貴族の航海士ヘンリー・クリフトン (Henry Clifton) を除けば、皆ブルジョワ階級に属するフランス人である。セゼール (Césaire) とクレール (Claire) のルノワール (Lenoir) 夫妻は、どちらも普通のフランス人の名前として通用する。夫が42歳、妻が20歳で、トリビュラ・ボノメの仲介による結婚である点も、結婚するためには夫に資産があることが重要であり、したがって、中年男性が若い妻を迎えることが珍しくなかった当時の習慣からすれば、普通であろう。セゼールは医者であり、社会的観点から見ると、極めて平凡な夫婦である。唯一、語り手兼主人公のトリビュラ・ボノメ

48) *Ibid.*, pp.201-247.

49) *Ibid.*, pp.249-373.

50) *Ibid.*, II, p.152. この日付は1887年版でも変更されていない。

(Tribulat Bonhommet) が奇妙な名前を持っており、社会的地位も平凡ではない。「トリビュラ」という名は、tribulation という語からの創作ではないと言われて<sup>51)</sup>いる。Tribulation は元々は「宗教的な苦悩」を表す語で、それが「逆境、肉体的、精神的試練」、また複数で「苦い体験、艱難辛苦」を表す語となっている。一方、「ボノメ」という姓の方は、bonhomie という語と結びつくと考えられている。Bonhomie は「善良さ」を意味し、それが「愚直」という意味にもなる。偽善的で、愚かではあるが、隠し事を好むボノメの人物像からすると、反語的である。また、「ボノメ」という姓は、アンリ・モニエ (Henri Monnier, 1799-1877) の生み出したブルジョワのカリカチュア、ジョゼフ・プリュドム (Joseph Prudhomme) や『ボヴァリー夫人』の登場人物である薬剤師オメ (Homais) を想起させる<sup>52)</sup>。この二人の作中人物と同様に、ボノメもまたブルジョワの権化であり、ボノメの名は自らの文学的ルーツを明らかにしていると考えられている。ボノメの社会的地位に関しては、副題にあるとおり、単なる医者ではなく、「教授資格を有する生理学博士」であり、「数々のアカデミーの名誉会員」であって、平凡ではない。しかし、次のボノメの言葉を信じるならば、彼こそまさに19世紀の人間を代表する人物なのである。

小生がその理想型であると十分な根拠を持って信じておる、我が世紀の顔立ちを、小生ひとりで、備えておるのです。要するに、小生は医者であり、博愛家であり、社交界の人なのです<sup>53)</sup>。

したがって、トリビュラ・ボノメは、その名前の奇妙さや社会的地位の高さにかかわらず、他のどの登場人物よりも凡庸な人物、19世紀の一般人の代表なので

51) この点に関しては、特に以下を参照。Myriam Watthée-Delmotte, «Nomination et projet sacré chez Villiers de l'Isle-Adam», *Les Lettres romanes*, XLI, 1987, pp.319-327.

52) トリビュラ・ボノメがオメやプリュドムに負っているものに関しては、特に以下を参照。L.T.P.C., II, pp.27-47.

53) O.C., II, p.148. 傍点部は原文でイタリック体、ゴシック体の語は小キヤピタル。

ある。「クレール・ルノワール」は、物語を当時の読者にとって卑近で、日常的な世界に位置づけようとする意志において、リアリズム小説にきわめて近いのである。

物語内容に関しても、「クレール・ルノワール」は見かけよりもずっと平凡である。ユイスマンスは『さかしま』において、「クレール・ルノワール」のことを、「この小説は単なる姦通を巡って展開し、言葉に尽くしがたい恐怖に結していた<sup>54)</sup>」と要約しているが、この理解は正しい。「クレール・ルノワール」の物語は、まずは平凡なブルジョワ家庭の、家内問題なのである。物語はセゼールが亡くなるまで、ほとんどルノワール家の内部で展開する。しかも、物語のほとんどを占めているものは、夕食と夕食後の会話である。これほど卑近で、平凡なものはない。もちろん、会話の内容は、先に見たように、死後の生、幻影の実在性、現実とは何かといった大仰なものである。しかし、第8章のエピグラフに引かれたゴンクール兄弟の言葉、「男たちの晩餐においては、デザートに魂の不死性を語る傾向がある<sup>55)</sup>」からすれば、驚くようなものではないのだ。たしかに、セゼールとクレールは、観念論的なこと、すなわち、ボノメの観点からすれば、非常識なことを述べる。しかし、そうした発言も、ボノメの「常識という厚い鎧の上を滑っていく<sup>56)</sup>」だけなのである。ルノワール夫妻は、ボノメにとって、「幻想的な」、つまり滑稽で、訳のわからない夫婦に過ぎない。「小生は、シーツにくるまって、あの幻想的な夫婦 (ce couple fantastique) のことを、涙が出るほどに笑いながら、眠りに就いたのです<sup>57)</sup>。」ボノメの観点からは、結局、驚くようなことは何も起こっていないのだ。しかも、ルノワール家の問題といえば、「単なる姦通」でしかない。リアリズム小説に付きものの、お決まりの姦通事件である。1867年当時、『ボヴァリー夫人』こそ、作者フロベールの意に反して、リアリス

54) Joris-Karl Huysmans, *À Rebours*, Texte présenté, établi et annoté par Marc Fumaroli, Gallimard, «folio», 1977, p.312.

55) *O.C.*, II, p.170.

56) *Ibid.*, p.180. ヴィリエが「鎧の合わせ目を見つけた」とマラルメ宛書簡で述べていたことを思い出そう。

57) *Ibid.*, p.201.

ム小説の典型とみなされていたことを思い出そう。クレールの姦通など、ボノメにとっては、取るに足らない出来事にすぎない。クレールの告白を聞いて、ボノメは次のように振る舞う。

「見下げ果てた女だ！」と小生は思いました。

そして、声に出して言いました。

「それで、何かまずいことでもありますか<sup>58)</sup>？」

物語をクライマックスに導くクレールの幻影さえも、もしボノメが自分でクレールの目の中にその残像を確認することがなければ、後悔に苛まれ、死に瀕して、狂った女性が見た幻影に過ぎなかつただろう。この点で興味深いのは、「クレール・ルノワール」と『テレーズ・ラカン』の類似である。『テレーズ・ラカン』が『ある恋愛結婚』のタイトルで、「クレール・ルノワール」の連載開始時に、『芸術家』誌に連載されていたことは、先に見たとおりである。しかし、「クレール・ルノワール」に影響を与えるには、あまりにも時期的に近過ぎるように思える。とはいえ、両者には、不思議な共通点がある。両者とも、妻の姦通と夫の死後の復讐が問題になっているのである。しかも、夫の復讐の内容を構成するのは、妻が見る夫の幻影なのである<sup>59)</sup>。とはいえ、「クレール・ルノワール」において、クレールの見る夫の幻影はその実在性が語り手兼主人公のボノメによって確認されるのに対して、『テレーズ・ラカン』において、テレーズとロランが苛まれる亡霊は、結局実体のない幻影に過ぎない。まさにこの点にこそ、ゾラの自然主義小説と「クレール・ルノワール」の違いがある。逆に言えば、もしクレールの見たものが幻影に留まっていたとすれば、「クレール・ルノワール」は立派な自然主義小説、リアリズム小説とみなされ得るということである。そして、も

---

58) *Ibid.*, p.210.

59) 周知のとおり、『テレーズ・ラカン』において、テレーズは愛人ロランと図って、夫カミーユを殺害するが、テレーズはロランと再婚した後、ロランと同様に、カミーユの亡霊に苦しめられることになる。



しそうであったなら、トリビュラ・ボノメは救われただろう。なぜなら、実証主義者の彼は自分の目に見えるものしか信じないのだから。クレールの見たものは、いくら恐ろしくても、彼には無関係な狂気の見せる幻影に留まっていただろう。

「幻影と狂気 (Vision et folie)！」と、小生は、取り乱して、立ち上がりながら、叫びました<sup>60)</sup>。

「クレール・ルノワール」は物語内容からしても、ほとんどリアリズム小説、ほとんど自然主義小説なのである。

そして、ボノメによる語りさえも、物語の導入部に当たる第1章の末尾におかれたボノメの次の言葉を信じるならば、リアリズム小説にとって重要な客観性を保っているといえるのである。

小生は、事実が生じ、自ずと分類されるがままになるよう、事実の簡潔な説明に留めるつもりであります。物語を註釈したい者は、註釈したら良い。小生は物語にどんな科学理論を付け加えるつもりもない。したがって、物語の全般的な印象は、読者によって提供される知性の程度に左右されるでありましょう<sup>61)</sup>。

実証主義者トリビュラ・ボノメが語る小説である「クレール・ルノワール」は、ボノメの作品としてはリアリズム小説、中でも自然主義小説にきわめて近いものである。しかし、トリビュラ・ボノメは作者ヴィリエが、ボノメの同輩にして、敵である読者に近づくためにかぶった仮面に過ぎない。したがって、「クレール・ルノワール」がたとえいくらリアリズム小説、自然主義小説に近くても、それは偽装に過ぎないのである。しかも、ヴィリエの偽装がボノメと彼の同輩を倒すためであるのと同様に、「クレール・ルノワール」は自らを否定するリアリス

---

60) *Ibid.*, II, p.213.

61) *Ibid.*, p.112.

ム小説、反リアリズム小説へと変貌するのである。

## 2) 「クレール・ルノワール」と反リアリズム

### 2-1) 「クレール・ルノワール」におけるリアリズム批判

「クレール・ルノワール」における最も明確なリアリズム批判は、逆説的に、トリビュラ・ポノメにとっての理想の文学として、リアリズム小説待望論として現れる。以下は、1887年版にのみ見られるポノメの言葉である。

—ああ、いったいつになったら現れるのでしょうか、われわれに本当の事柄を語る作家が (un écrivain qui nous dira des choses vraies)! —実際に起こる事柄を! —みんながすみずみまで知っている事柄を! 街 (les rues) でうわさになっている、かつてもうわさになったし、これからもうわさになるだろう事柄を! 要するにまじめな事柄を (des choses SÉRIEUSES)! こういう作家こそ〈一般読者〉(Public) から尊敬されるに値するのです。なぜなら、こういう作家こそ〈一般読者の作家〉(la Plume-publique) だからです<sup>62)</sup>。

もしリアリズムを、序論で確認したように、「日常生活を、実際の体験にもっとも近い形で、見聞きした事柄を源に、人生の真実に他ならない、平凡さを排除することなく表象しようとする<sup>63)</sup>」傾向と捉えるならば、上記の引用でポノメが理想の作家としているのは、まさにリアリズム小説家に他ならないと言えるだろう。この引用箇所と、ゴンクール兄弟の『ジェルミニー・ラセルトゥー』の「序文」を比較してみると、ポノメの言葉はきわめてパロディックな響きを持っていることがわかる。以下は、『ジェルミニー・ラセルトゥー』の「序文」からの引用である。

一般読者 (public) は偽りの小説を好む。この小説は真実の小説 (un ro-

62) *Ibid.*, p.167. ゴシック体の語は、原文で小キャピタル、〈 〉内の語は語頭大文字。

63) Philippe Dufour, *op.cit.*, p.1.

man vrai) である

一般読者は社交界に行くそぶりの書物を好む。この書物は街 (la rue) の出だ。

[…]

さて、この本が酷評されようとも、この本にとってはどうでも良いことである。今日、〈小説〉(le Roman) は規模を広げ、成長している。今日、小説は文学的研究と社会調査の、情熱に満ち、活気にあふれる、まじめで偉大な形式 (la grande forme sérieuse, passionnée, vivante, de l'étude littéraire et de l'enquête sociale) となろうとしている。今日、小説は、分析と心理学的探究によって、〈現代の精神史〉(l'Histoire morale contemporaine) になりつつある。今日、小説は科学の調査研究と義務 (les études et les devoirs de la science) とを自らに課した。この今日、小説は科学の自由と率直さを要求することができるのである<sup>64)</sup>。

二つの引用を比較してみると、内容のみならず、語彙のレベルでも共通点を見出すことができる。「本当の事柄 (des choses vraies) を語る作家」と「真実の小説 (un roman vrai)」、「街 (les rues)」でうわさの事柄を語る作家と「街 (la rue)」の出の書物、「まじめな事柄 (des choses sérieuses)」を語る作家と「まじめで偉大な形式 (la grande forme sérieuse)」となった小説、という具合である。先に見たように、「クレール・ルノワール」は、副題によって、生理学博士であるトリビュラ・ボノメ医師による「覚書」の体裁を取っている。ボノメの作品としては、「クレール・ルノワール」は科学の書なのである。この点でもゴンクール兄弟が述べていることと、ボノメの理想が一致していることがわかる。すなわち、ボノメが理想としているのは、自然主義的小説なのである。そして、ボノメが理想としているということは、ヴィリエが異議を唱えているということなのだ。

---

64) Edmond et Jules de Goncourt, *Germinie Lacerteux*, Édition établie par Nadine Satiat, GF-Flammarion, 1990, pp.55-56. 〈 〉内の語は、原文では語頭大文字。

先にも指摘したように、ポノメが理想とする文学についての引用の記述は、1887年版「クレール・ルノワール」において加筆されており、1867年版には存在しない。この点を考えてみたい。第1章第1節で確認したように、1887年に想定されていた読者は、1867年に想定されていた読者と違って、作者ヴィリエの友人たちであり、トリビュラ・ポノメという登場人物の存在についてすでに知っている読者であった。彼らはポノメの意見が作者ヴィリエの意見と単に異なるだけでなく、正反対であることを知っている読者であった。一方、1867年の読者はポノメの意見とヴィリエの意見を混同する危険が常にあったのである。もしヴィリエがリアリズム、自然主義に反対の立場なら、先に引用した発言をポノメにさせることは、1867年においてはかなり危険なことであったと思われる。さらに1867年には、ヴィリエはゴンクール兄弟と交流があり、『文学と芸術誌』への寄稿まで依頼していたことを思い出す必要がある。先のポノメの発言は、ゴンクール兄弟なら、すぐさま自分たちのパロディと見抜いたであろう。ゴンクール兄弟とあからさまに事を構えることは、ヴィリエの望むところではなかったに違いない。1887年には事情が異なっていた。当時、自然主義、特にゾラの自然主義はすでに危機に瀕していた<sup>65)</sup>。「クレール・ルノワール」を含む小説集『トリビュラ・ポノメ』が出版されるのは1887年5月であるが、同年8月18日の『フィガロ』紙 (*Le Figaro*) にはゾラの弟子たちによる「『大地』に反対する五人の宣言<sup>66)</sup>」が掲載され、自然主義文学の危機が決定的となることになる。ヴィリエは、当時、テオドル・ド・ヴィズヴァ、エドワール・デュジャルダン (Édouard Dujardin, 1861-1949)、エミール・エンヌカン (Émile Hennequin, 1858-1888) といった自然主義に反対する若い作家たちに師と仰がれていたのである<sup>67)</sup>。1887年において、ポノメに自然主義的理想を口にさせることは、ヴィリエ

65) 特に以下を参照。Michel Raimond, *La Crise du roman. Des lendemains du Naturalisme aux années vingt*, Corti, 1966, pp.25-43.

66) アラン・パジェス、『フランス自然主義文学』、足立和彦訳、白水社、文庫クセジュ、2013年、27ページ (Alain Pagès, *Le Naturalisme*, Presses Universitaires de France, «Que sais-je ?», 1989).

67) Michel Raimond, *op.cit.*, p.34.

自らの理想が自然主義と対立するものであることを、明確にする意味しか持たなかったのである<sup>68)</sup>。

上記で問題にした引用ほどあからさまではないが、より根本的なリアリズム批判も「クレール・ルノワール」には含まれている。小説の中心を占めるボノメ、セゼール、クレールによる食後の会話の内容である。先に見たように、この会話は、実証主義者、ヘーゲル哲学者にしてオカルティスト、信仰のみに生きるキリスト教徒と、立場の違う三者が、死後の生、幻影の実在性、現実とは何かを巡って交わす哲学的議論である。この議論は実証主義者で唯物論者のボノメを、ルノワール夫妻がイデアリズムの観点から攻撃し、やり込めるものと一般的に理解されているが、リアリズム批判としても読める。まさにリアリズムのよりどころである「現実」が議論の対象となっているからである。

この議論はまずボノメの次の質問から始まる。

精神病院に務める医師は、患者の幻覚が有し得る現実の度合い (le degré de *réalité*) を、概算でも、見積もってみようと思ったことがあるでしょうか<sup>69)</sup> ?

ボノメ自身としては「このとっぴな質問<sup>70)</sup>」に対するまじめな答えを期待していない。むしろ議論をくじくことを望んでいるのだが、セゼールはこれに次のように答える。

あなたにお答えする前に、[…]、あなたが〈現実〉 (*la Réalité*) という語

---

68) ダニエル・シャブロンは、1887年版「クレール・ルノワール」では、トリビュラ・ボノメをエミール・ゾラのカリカチュアとみなすことができるというたいへん興味深い意見を述べている。Danielle Chaperon, «Regards obliques et anamorphoses narratives. Claire Lenoir.», *Europe : J.-K. Huysmans/Villiers de l'Isle-Adam*, 83<sup>e</sup> année, No. 916-917, août-septembre 2005, pp.215-228.

69) *O.C.*, II, p.175. 傍点部は、原文ではイタリック体。

70) これはボノメ自身の用いている表現である。原語では、«cette question incongrue», (*Ibid.*).

でもって言おうとなさっていることをお教え頂きたいものですな<sup>71)</sup>。

感覚的に把握可能なもの、すなわち「自分の目に見えるもの、感じられるもの、触れるもの」を「現実」とみなすというボノメの主張をセゼール・ルノワールは反駁していき、次のように結論づける。

—そういうことなら、[...] もし現実 (le réel) が、つまるところ、目に見えるものであるならば、狂人の見る幻覚がなにゆえ現実の名 (le titre de réalité) に値しないのか、私には納得できませんね<sup>72)</sup>。

ここで注目したいのは、この議論の非生産性である。セゼールは現実とは何かをボノメに問いつつ、答えを出すかわりに、最初の質問にボノメを送り返している。そして、この議論は数ページ先に行ってもやはり同じ調子なのである。目の前にある薪を現実だと主張するボノメに対して、セゼールは次のように反論する。

—私はこの薪を消してしまうのに、火にくべてしまうだけでいいのです。ほら、あなたの薪は消えてしまいました。別のものになったのです。—このような現実とは一体何なのでしょう？消えてしまうし、存在すると同時に存在しない現実とは？外的な偶然次第の現実とは？こんなものを“現実”と呼べるのでしょうか？... とんでもない！—これは〈生成〉です。〈可能性〉です。—〈現実〉(du Réel)ではありません。なぜなら、それは存在し得ると同様に存在し得ないのですから。したがって、〈現実〉(la Réalité)とはこのような偶然性とは別のものということになります。さあ、こうして、今度は論理的に、私たちは最初に立てた問いに戻ってきました。“現実”(la RÉALITÉ)

---

71) *Ibid.* 〈 〉内の、傍点を付した語は、原文ではイタリック体で、語頭が大文字。

72) *Ibid.*

とは何か<sup>73)</sup>？”

数ページを費やして、議論は答えの出ぬままに最初の問いに戻ってくる。セゼールはあたかも答えを出すのをあえて渋っているかのようである。そして、ポノメ、セゼール、クレールの三者の議論は、最後まで堂々巡りと前言撤回に満ちており、明確な結論には決して至らない。もし答えを出すことに重きが置かれているのならば、これはまったく無駄な議論である<sup>74)</sup>。しかし、このような雑駁で、堂々巡りの議論にも意味はあるのである。なぜなら、当初はポノメによって自明の理とされた「現実」というものが、不透明で、疑わしい、問題含みのものに変化してしまうからである。現実描写を基盤とするリアリズムにとって、これほど危険なことはないのである。

しかしながら、議論そのものが答えを出すことを目指していないために、結局のところ、ポノメ、セゼール、クレールの三者は、最後まで自説を唱え続けるだけである。ポノメにとっては目に見えるものが「現実」であり、セゼールにとっては観念が、クレールにとっては神のみが「現実」であり続ける。実証主義者ポノメは、議論でいくら論駁されようとも、最終的には無傷でいられるのである。

また、「現実」を巡る議論は、リアリズムにとってメタレベルに位置する問題である。たしかに、この議論によって、リアリズムはその根本から問い直しを迫られることになる。しかし、この議論を伝える物語は、議論の内容とは無関係に、まさにリアリズム的手法によって存在している。したがって、この議論が中心を占めているからといって、「クレール・ルノワール」は反リアリズム小説であるとは言えない。本作品が反リアリズム小説になるには別の仕掛けが必要なのである。

---

73) *Ibid.*, p.180. 傍点部は、原文ではイタリック体、〈 〉内の語は、語頭が大文字、ゴシック体の語は小キヤピタル。

74) 1887年版の「クレール・ルノワール」の第10章のタイトルは、いみじくも「哲学的雑談 (Favras philosophique)」となっている (*Ibid.*, p.179)。

## 2-2) 反リアリズム小説への変貌：トリビュラ・ボノメという語り手の問題と転 説法

「クレール・ルノワール」は普通のリアリズム小説と様々な点で異なっていると思われるが、次の二つの点において、通常のリアリズム小説の規範を逸脱していることは間違いないと思われる。まず、トリビュラ・ボノメという語り手を設定していること。次に、物語のクライマックスをなす出来事が、転説法と呼ばれる語り手の違反に基づいていること。本論では特に二つ目の点に注目するが、最初の点も簡単に考察しておきたい。

フロベール以降のリアリズム小説の多くが、三人称を用いて語る語り手、G・ジュネットの用語では異質物語世界的な語り手 (*narrateur hétérodiégétique*) を据えているのに対して、「クレール・ルノワール」はトリビュラ・ボノメという、一人称で語る語り手、等質物語世界的な語り手 (*narrateur homodiégétique*) を据えている。このことによって、「クレール・ルノワール」の与える印象は、三人称で語る、異質物語世界的な語り手によるリアリズム小説の与える印象とはかなり異なる。しかし、このことだけで、「クレール・ルノワール」がリアリズム小説の規範を逸脱しているとは言えないだろう。たとえば、ギ・ド・モーパッサン (Guy de Maupassant, 1850-1893) の「ミス・ハリエット」(«Miss Harriet», 1883) や「ジュールおじさん」(«Mon oncle Jule», 1883) のように、等質物語世界的語り手を中心に据えながら、リアリズム小説とみなされているものもあるからだ。「クレール・ルノワール」が通常のリアリズム小説とみなしにくいのは、語り手トリビュラ・ボノメが作者ヴィリエの嫌悪するものを体現する、「〈信頼できない〉語り手<sup>75)</sup>」であるからだ。ボノメは原則的には、作者ヴィリエと正反対の価値観を持っているものと考えられている。さらに彼は愚かで、しばしば他の登場人物の発言を誤解したり、うぬぼれが強く、失敗を成功のように言い繕った

75) ウェイン・C・ブースは、語り手はその作品の規範、すなわちブースの考えでは、内在する作者の規範を代弁し、それに従って行動する場合を、「〈信頼できる〉語り手」、そうでない場合を「〈信頼できない〉語り手」と読んでいる。ウェイン・C・ブース、『フィクションの修辞学』米本弘一、服部典之、渡辺克昭訳、水声社、1991年、206-207 ページ、(Wayne C. Booth, *The Rhetoric of fiction*, 1961) 参照。



り、隠し事を好む性質で、他の登場人物に対して常に偽善的である。したがって、彼の言説は、場違いな発言、逃げ口上、前言撤回、自己欺瞞といったものにあふれている。フィリップ・アモンの言うとおり、リアリズムの言説が、情報を正確に伝えたいという教育的欲望に支えられており、そのためにコミュニケーションを乱す「雑音」を遠ざけ、明快さ (lisibilité) を保とうとするならば、トリビュラ・ボノメのような語り手は正確な情報伝達を阻む「雑音」を常に生じさせる、反リアリズム的な語り手と言えよう。その一方で、トリビュラ・ボノメ自身による語り<sup>76)</sup>ほど、トリビュラ・ボノメという特殊な登場人物を描き出すものはないとも言える。したがって、「クレール・ルノワール」において伝えられるべき第一の情報が、語り手トリビュラ・ボノメの人物像にあるとするならば、「クレール・ルノワール」は、この点においては、きわめて特殊なリアリズム小説、ボノメがボノメを語るという意味で、いわば「主観的な」リアリズム小説と言えなくもなからう。

これに対して、二つ目の点はリアリズム小説ではまずあり得ない事柄が問題になっている。とはいえ、単に亡霊が出るのが現実にはありそうにないということではない。亡霊が出るだけならば、ゾラの自然主義文学の嚆矢である『テレーズ・ラカン』においても可能であった。物語のクライマックスにおいてボノメが味わう驚愕は、単に亡霊を見たという次元のものではない。詳しく検討してみよう。

まず確認したいことは、オティゾールに変貌したセゼールが、切り落としたクリフトンの首を高々と掲げている姿の残像を、クレールの目の中に確認するまでは、ボノメはセゼールの亡霊を見ていないということである。それまでの間、ボノメがクリフトンの死とセゼールの変貌について知るの、ただ物語を通じてなのである。

---

76) この語り手は、語り手であるボノメに対して、内的に焦点化されている。これはG・ジュネットによれば、論理的な焦点化である。『一人称』に置かれた物語言説が論理的に含意する唯一の焦点化とは、語り手に対する焦点化なのだ (G・ジュネット、前掲書、240 ページ)。

英国人航海士ヘンリー・クリフトンの死は、ロンドンにいる文通相手からの手紙の追伸で、ボノメに伝えられる。手紙によると、クリフトンはオセアニアの岩礁地帯で、着岸できそうな島を探す先鋭隊として、ある島に上陸したところ、おそらくはオティゾールと呼ばれる土着民に、不意に襲われて、首を切られ、殺されたのである。クリフトンの殺害者は、切り取った首を星空に向かって振りかざしながら、自ら死を選ぶかのように、底なしの砂の中に埋もれていったという。興味深いのは、この手紙を読んだボノメの反応である。彼は、クリフトンのことを忘れようとすると同時に、オティゾールという存在については聞いたことがあると述べている。

小生はこの不愉快な報せを受け取って、ただちに、ヘンリー・クリフトン卿に関係するどんなことも考えないようにしました。小生はあのたいへん珍しい、漆黒のオティゾールたち、別名、難破の見張り屋たちについては聞いたことがありました。ノルウェーとオランダの船乗りたちはこの黒人たちを〈砂地獄の悪魔〉とも呼んでいます。これら凶暴な食人鬼たちはまだ解明されていないある謎に包まれています。夜には、時々、遠く、岩礁の上から、彼らの大きな叫び声、戦を告げる不吉な怒号が聴こえます。あれらは真正正銘の亡霊 (de véritables ombres) です。彼らのうちの一人として捕らえられた者はおらず、発砲されても、倒れるところや逃げるところを見られた者はおられません。「彼らが死んだ場合、彼らが死者をどうするのかはわからない」と、かなり奇妙な言い方で、デンマーク人の地理学者ビョルン・サクヌセムが述べています。

小生は、小生の眠りを乱しかねないと思われるこの事件を、記憶から追ひ払う決心をしました<sup>77)</sup>。

ボノメは、ヘンリー・クリフトンのことは考えまいと言いつつ、オティゾールの

77) O.C., II, pp.207-208. 傍点部は原文でイタリック体、〈 〉内の語は語頭大文字。

ことはかなり長々と語っている。もちろん、これにはオティゾールの実在性を強調するとともに、幻想的で神秘的な存在にするという、物語の伏線として重要な役割があるだろう。しかし、同時に、クリフトンの死と無関係なことであれば、オティゾールについて語ることにボノメはやぶさかではないということも示している。つまり、ボノメの恐怖の対象はクリフトンの死、あるいは死そのものなのであって、オティゾールという存在ではないということだ。しかも、クリフトンの死のことも、ボノメにとっては、忘れてしまえば、それで済む問題なのだ。

一方、セゼール・ルノワールの変貌については、クレールによって語られる彼女の見た夢の話によって、ボノメに伝えられる。ボノメは、ディーニュのホテルで、クリフトンの死を告げる手紙を読み終わったところで、隣室に滞在中のクレールに呼ばれ、彼女の部屋に招じ入れられる。その日はちょうどセゼールの一周忌であり、クレールは一年で老女のようになって、死にかけていた。クレールはボノメに自分がクリフトンと姦通の罪を犯したことを告げ、夫セゼールがまもなく彼女の命を奪いに来ると述べる。

生前は、[…]、彼は何も知らなかったのです！—何も！決して何も！しかし、このことをよくご理解くださいね。今は、彼は知っていると思わすのです。今晚は一周忌です！—まもなく10時が鳴ります…。そうです、彼は私の命を奪いに来ると思わす—目を通して！ […]<sup>78)</sup>。

興味深いのは、ここでもやはりボノメの反応である。引用してみよう。

ああ！実に奇妙なことです！生命体組織の神秘です！場所、時刻、そして記憶にもかかわらず、小生は眉根ひとつひそめなかったのです。—「錯乱だ、それ以外の何ものでもない」と思わす。—内心これほど調子が良かったことはかつてありませんでした。状況が状況ですので、しかるべく悲しそう

---

78) *Ibid.*, p.211. 傍点部は、原文ではイタリック体。

な顔つきをしておりましたが、小生は自分が陽気で、澁刺として、爽快なのを感じておりました！右の頬でこっそりとプラリーヌを溶かしながら、自分の平静さに満足しておったのです。

実のところ、何を恐れる必要があったでしょう？—彼女の夫は、好都合にも、目下亡くなっておるのです<sup>79)</sup>。

クレールの語る事がどれほど異常でも、あるいは異常であればあるだけ、ポノメはクレールが狂っているとみなすことができる。そして、彼女の話の異常な点を、彼女の錯乱のせいにしてしまえば、ポノメは安心していられるのである。たしかに、死んだ夫が命を奪いに来るとは常識的には考えられない。したがって、ポノメを守る「常識という厚い鎧」は「想像の産物 (l'imaginaire)」と「現実 (le réel)」とを隔てる壁として機能していることがわかる。ポノメはむしろ「現実」の側にいる。

一方、セゼールがオティゾールに変貌したということは、先にも指摘したように、クレールの見た夢の話である。該当箇所を引用する。

「彼を、私は彼をまた見たのです！また夢で！」とクレール・ルノワールは、はっきりと小生に向けてということもなく、言いました。「彼が亡くなってから、おおよそ、三ヶ月半。ただ、おそらく夢の偶然のせいでしょう。」とルノワール夫人は、しわがれ、かすれた声で付け加えました。「彼がそのとき私に現れた外見のことです。たしかに彼でした。—ああ！彼だったのです！」

そして、狂人の病的な微笑みが、墓場に漂う鬼火のように、彼女の唇の上に浮かびました。

「あなたは、夢のせいで、私の頭がおかしくなったと思って、私のことを哀れに思われるでしょうね。」と彼女は続けました。「けれど、彼は身体も、

---

79) *Ibid.*, p.212.

背丈も、肌の色もまったくそっくりだったのです。オセアニアの航海に関する報告書で—ご存知のように—言及されているあの得体の知れない存在に (*à ces êtres obscurs*)。』

小生は手紙のことを思い出しました。ぎくりとして、耳を疑いました。二つの考えを結びつけようとしたのですが、無駄でした。人間の論理では説明の不可能な性質のひらめきが、小生の理性の目をくらましてしまったのです。小生は喉の奥に恐怖の叫びがぞっとするほど押し込められているのを感じました<sup>80)</sup>。

引用で何度も強調されているように、ボノメからすれば、クレールの話は、狂人の、しかも夢の話である。そういう意味で、二重に非現実的な話であり、通常のボノメの立場からは一笑に付されることだろう。ここでボノメが恐怖を感じるのには、先の手紙の内容とクレールのお話を直感的に結び付けてしまったからである。だから、ボノメには恐怖の理由を説明することができない。ただ恐いのである。しかし、この恐怖も一過性のもに過ぎない。クレールが死んでしまえば、すなわち、クレールのお話が終わってしまえば、ボノメの恐怖は去るのである。クレールは何か幻影を見て息絶え、ボノメは安堵することになる。

「ああ！」と彼女は飛び上がって叫びました。「ほら、言ったとおりでしょう！... あそこにいます！見てください！あそこ！あそこに！私の悪夢の怪物が！ほら、そこに—ルノワール氏が、彼もまた、自分で夢に見た姿で！ということは、彼はハムの子孫だったのでしょか、〈死〉においてこんな風に変化した (*RÉALISÉ*) なんて？誰のためにあんなに長く刃を研いでいるの？—あんなに冷静に—恐ろしい海の前で—あの刀の刃を？... ああ！吸血鬼！悪魔！人殺し！...」と不幸な女性はあえぎました。「その壁から出て行け！私の哀れな目をほうっておいて！」

80) *Ibid.*, p.214. 傍点部は、原文ではイタリック体。

彼女の両手は突然激しい痙攣に引きつり、彼女の不思議な両目は大きく見開かれました。彼女が見ていたものは、疑いなく、たいへん恐ろしいものだったので、叫び声を上げる力さえもはや胸中にないようでした。彼女は激しくもがき、そして、再び倒れると、身を固くして、常に視線を壁の方に向けたまま、不吉なすすり泣きのようなものを上げていました。

おそらく、彼女は息を引き取ったのでしょう。しかし、確信は持てませんでした。

[…]

それで、小生は燭台を取って、亡くなった女の顔に近づけました。そして、神経質に震えながら、ルーペで彼女をよく見たのです。

「—ようやく！—終わった！…」と考えて、安堵の吐息をつきました。彼女はちゃんと死んでいました<sup>81)</sup>。

引用からわかるとおり、ポノメはこの時点で、クレールの見ているものを見ていない。だからこそ、クレールの死がポノメに安堵をもたらすのだ。恐ろしいものを喚起する言葉をもはや聞かなくて済むからだ。

実は、この時点でポノメがセゼールの幻影を見ていないことが、物語のクライマックスにとって、非常に大きな意味を持っている。この時点でクレールが見たものをポノメが見なかったということは、クレールが見たものは幻影に他ならなかったということになる。それはポノメにとって、クレールの切れ切れの言葉と表情や身体の動きから想像する他ないもの、クレールがポノメに語って聞かせた夢の物語の内容と同種のものということになる。すなわち、G・ジュネットの用語を用いれば、クレール・ルノワールを物語世界内の語り手 (*narratrice intradiégétique*) とし、トリビュラ・ポノメを物語世界内の聴き手 (*narrataire intradiégétique*) として成立する、メタ物語世界 (*métadiégèse*) の内容ということになる。オティゾールに変貌したセゼール・ルノワールは、このメタ物語世界

---

81) *Ibid.*, p.216. 傍点部は原文ではイタリック体、〈 〉内の語は語頭大文字、ゴシック体の語は小キャピタル。

の登場人物であり、ボノメのいる世界を現実とすれば、クレールの妄想によって形成された物語世界の登場人物に過ぎない。ところが、物語のクライマックスで、ボノメはクレールの目のうちに、オティゾールに変貌したセゼール・ルノワールがヘンリー・クリフトンの首を振りかざしている残像を発見する。ということは、メタ物語世界の登場人物が、その物語の聴き手ボノメのいる現実の世界（ここでは、むしろボノメを語り手とする物語世界であるが）に出現したことを意味する。これは、G・ジュネットが「転説法（*métalepse*）」と呼ぶ、語り上の違反である。ジュネットの定義を確認しておこう。

物語世界外の語り手もしくは聴き手が物語世界の空間へ侵入すると（あるいは物語世界〔内〕の作中人物たちがメタ物語世界の空間に侵入すると、等）—あるいはコルターサルの場合がそうであるようにその逆であってもよい—、ある奇妙な効果が生じるということだ。それは滑稽な効果であることもあれば（スターンやデイドロのように冗談めいた調子でそうした侵入が示される場合）、幻想的な効果であることもある。

われわれとしては、この種の違反のすべてを示すために、転説法〔語り  
の転位法 *métalepse narrative*〕という術語を用いることにしよう<sup>82)</sup>。

ジュネットが言及している「コルターサルの場合」とは、フリオ・コルタサルの短編小説「続いている公園<sup>83)</sup>」のことで、小説を読んでいる男が作中人物の一人に殺されてしまうことが問題となっている<sup>84)</sup>。これはメタ物語世界の作中人物が、

---

82) ジェラルール・ジュネット、前掲書、275 ページ。ジュネットは転説法について、『物語の詩学 続・物語のディスクール』、和泉涼一、神郡悦子訳、書肆・風の薔薇、1985 年、(Gérard Genette, *Nouveau discours du récit*, Seuil, 1983) でも取り上げており、さらに、『*Métalepse. De la figure à la fiction*, Seuil, «Poétique», 2004 において、様々な事例を考察している。

83) フリオ・コルタサル、「続いている公園」(«Continuidad de los Parques»), 『遊戯の終わり』、木村榮一訳、国書刊行会、1977 年、9-10 ページ (Julio Cortázar, *Final del juego*, 1956) 参照。

84) ジェラルール・ジュネット、前掲書、274 ページ参照。

物語世界の空間に侵入する例であるから、「クレール・ルノワール」で確認した例と同様である。

マリー＝ロール・ライアンは、ジュネットの研究と、ブライアン・マックヘイルの研究<sup>85)</sup>を参照しつつ、「修辭的転説法 (métalepse rhétorique)」と「存在論的転説法 (métalepse ontologique)」の区別を提案している<sup>86)</sup>。両者の違いは、物語世界内と物語世界外とを分ける境界、ないし物語世界とメタ物語世界とを分ける境界が、転説法によって、浸食されるかどうかによる。ライアンの比喻によれば、「修辭的転説法は隣接する組織まで浸食しない無害な腫瘤に喩えられ、存在論的転説法はそれらの組織の構造を破壊してしまう、広がっていく増殖に喩えられる<sup>87)</sup>。」ライアンによれば、存在論的転説法は、想像の産物 (l'imaginaire) と現実 (le réel) を隔てる境界を根本的に問題にする。コルタサル「続いている公園」の例は、存在論的転説法の例である。

「クレール・ルノワール」の場合はどうであろうか。クレールの妄想の中にしか存在しなかった人物、したがって想像の産物である、オティゾールに変貌したセゼール・ルノワールが、クレールの目の中の残像とはいえ、現実の世界にいるボノメの目に見えるものとなったということは、想像の産物と現実を隔てる境界が侵犯されたことを意味する。したがって、「クレール・ルノワール」に見られる転説法は、存在論的転説法であるということが出来る。このことは、この事実に対するボノメの以下の反応を見ても明らかである。

「しかし、—しかし」と、小生は死んだ女をはずかひに見ながらどなりました。「まさしく... 〈空間的広がり (l'Étendue)〉と〈持続 (la Durée)〉という古びた嘘を無視して... 今日あらゆるものがその自明性を明らかにして

85) Brian McHale, *Postmodernist Fiction*, London and New York, Routledge, 1987.

86) Marie-Laure Ryan, «Logique culturelle de la métalepse, ou la métalepse dans tous ses états», in les *Métalepses. Entorses au pacte de la représentation*, Sous la direction de John Pier et Jean-Marie Schaeffer, Édition de l'École des Hautes Études en Sciences Sociales, 2005, pp.201-223.

87) *Ibid.*, p.207.



いる嘘ではあるが... まさしく、〈幻 (l'APPARITION)〉は現実<sup>レ</sup>に外的なもの  
でなければならなかったのだ。なんらかの計量しがたい程度に、おそらく<sup>レ</sup>  
命<sup>レ</sup>流体<sup>レ</sup>として、あんな風にお前の透視力のある瞳に映じるためには！」

小生は話止め、そして、髪を逆立て、こぶしを握りしめて、小声で、結論  
を出しました。

「しかし... そうだとすると、—ここはどこだ (où sommes-nous ?)<sup>88)</sup> ?」

このポノメの結論は、まさに存在論的転説法を前にした反応である。ポノメは自  
分が現実の世界にいるのか、それともクレールの妄想の世界、物語世界にいるの  
かわからなくなったのである。これこそ、G・ジュネットが転説法のもっとも衝  
撃的な点としていることだ。

転説法においてもっとも衝撃的に思われる点は、受け入れ難くはあるがなか  
なかに根強い以下の仮定の中にある。すなわち、物語世界外はおそらく、つ  
ねにすでに物語世界なのであり、語り手とその聴き手たち—つまりわれわれ  
—は多分、やはり何らかの物語言説に属している、という仮定である<sup>89)</sup>。

先に見たように、ポノメを守る「常識という厚い鎧」は「現実」と「想像の産  
物」を隔てる壁として機能していた。「クレール・ルノワール」は転説法によっ  
て、この境界を無効にしてしまう。これこそ、ヴィリエがマラルメに発見したと  
書簡で伝えた「鎧の合わせ目」だろう。

存在論的転説法が無効にする境界は、リアリズム小説には不可欠な境界である。  
なぜなら、「現実」を語るには、「現実」が「非現実」と区別される必要があるか  
らである。「クレール・ルノワール」は物語のクライマックスでこの境界を侵犯  
することによって、決定的に反リアリズム小説に変貌することになる。しかし、

88) O.C., II, pp.220-221. 傍点部は、原文ではイタリック体、〈 〉内の語は語頭大文字、  
ゴシック体の語は小キャピタル。

89) ジェラルール・ジュネット、前掲書、276-277 ページ。

マリー＝ロール・ライアンが指摘しているように、存在論的転説法は、境界侵犯するということによって、間接的に境界の存在を認めることにもなる<sup>90)</sup>。「クレール・ルノワール」が反リアリズム小説であるためには、まず偽リアリズム小説である必要があったのである。これが実証主義者トリビュラ・ボノメが語り手であることの必然性である。

しかし、「クレール・ルノワール」が、語られる出来事が現実かどうかのためにによって規定されるトドロフの定義による「幻想」とは、根本的に異なっていることは理解しておく必要がある。これは、たとえば、モーパッサンの短編小説「オルラ」(«Le Horla», 1887)の結末と「クレール・ルノワール」の結末を比べてみれば、よくわかる。「オルラ」においては、読者はひとつの二者択一に導かれる。すなわち、オルラは語り手の妄想なのか、それとも実在するのか。妄想であれば、オルラは実在しないし、実在するのであれば、妄想ではない。この幻想小説において、読者がいくらこれら二つの解の間でためらおうと、現実(le réel)と妄想(l'imaginaire)を分ける境界は揺るぎなく存在している。「クレール・ルノワール」のように、「ここはどこだ?」という存在論的問いは投げ掛けられない。トドロフの定義による幻想小説は、現実と非現実との境界を侵犯することはない。その意味で、リアリズム小説と類縁であり、「クレール・ルノワール」とは根本的に異なるのである。

### 2-3) 「考えさせる」小説

さて、最後に、このたいへん手の込んだ反リアリズム小説の存在意義について、考えてみねばなるまい。一般に「クレール・ルノワール」の意義は、「純粹な観念は物体と同様に現実的に存在する<sup>91)</sup>」という観念論的主張にあると考えられている。「クレール・ルノワール」が反実証主義、反唯物論の書として理解されてきたゆえんである。しかし、本論では少々異なる観点から「クレール・ルノワール」の意味について考えてみたい。

90) Marie-Laure Ryan, *op.cit.*, p.222.

91) プレイヤッド版全集の「クレール・ルノワール」の解説を参照(O.C., II, p.1136)。

最初に見たように、「クレール・ルノワール」はブルジョワを風刺する目的で考案されていた。作者ヴィリエは自らの敵であるトリビュラ・ボノメに成り済まして、ボノメの同輩である読者を攻撃する戦略であった。したがって、小説の結末となるボノメの存在論的驚愕「ここはどこだ? (où sommes-nous ?)」は、読者にも共有されることが期待されているということになる。ボノメは同質物語世界的語り手 (narrateur homodiégétique) であり、登場人物としては物語世界内の存在であるが、語り手としては物語世界外の存在、すなわち物語世界的語り手 (narrateur extradiégétique) として、物語世界外の聴き手 (narrataire extradiégétique) である読者と向き合っている。「ここはどこだ?」はもちろん物語世界内の人物ボノメによって発せられる問いであるが、ボノメが同時に語り手であることによって、物語世界外の聴き手である読者に波及することになる。すなわち、「ここはどこだ?」は「クレール・ルノワール」の読者が最終的に到達すべき問いとしてあることになる。したがって、「クレール・ルノワール」の結末で読者が得るものは、答えではなく、問いだということになる。

では、この問いは読者に何を問い掛けているのだろうか。先に見たように、ボノメがこの問いを発するのは、現実と妄想、現実と物語世界を隔てる境界が無効になってしまったためだ。これは現実とは何かがわからなくなってしまったということだ。こうして再び、あの答えのない堂々巡りの議論にたどり着くことになる。現実とは何か。「クレール・ルノワール」が読者に与えるのは、安心できる答えではなくて、答えのない、したがって恐ろしい問いなのである。このことは、実は「クレール・ルノワール」の冒頭からはっきり示されている。ボノメは以下のように自分の作品の目的を説明している。

小生は〈恐怖 (l'Effroi)〉が普遍的に実りのある感覚だとは思いません。  
[...]

しかしながら、考えさせること (faire penser) があらゆるためらいに勝る義務であるのは本当です!... 熟慮の結果、小生は話すことにします。各人は自らの内に自分の揺らぐことのない何か (*aliquid inconcussum*) を持つ

ておらねばならんです。[...] 小生の物語の信憑性に関しては、賭けても良いですが、何人も過度に冷やかしたりはしないでしょう。なぜなら、後続の事実が根本的に誤りであると仮定してさえも、それらの単なる可能性の考えだけで、論証され、認められたそれらの真実性と同様に恐ろしいでしょうから。—それに、一度考えられたら、神秘的な〈宇宙〉において、ほんの少しでも起こらないことがありますか<sup>92)</sup> ?

ボノメによれば、「クレール・ルノワール」における恐怖は読者を「考えさせる (faire penser)」ためにある。そして、「考えさせる (Faire penser)」はまさに『文学と芸術誌』のスローガンであった。したがって、「クレール・ルノワール」が答えではなく、問いしか与えないのは当然なのである。読者は自らの信念、自らの「揺らぐことのない何か」に従って、考えねばならない。しかし、ボノメのように実証科学を信じようと、セゼールのようにヘーゲル哲学やオカルティズムに訴えようと、クレールのように神のみを信じようと、決して安心はできない。この物語の内に救いはないのだから。この物語は読者にとってこそ恐ろしい物語なのだ。

ボノメが物語の信憑性に言及していることに着目しよう。「クレール・ルノワール」は初めから真実かどうかを二義的問題にしてしまっている。この点でまさに「クレール・ルノワール」は反リアリズム小説なのだ。なぜなら、リアリズム小説は「真実」ないしは「本当らしさ」を自らの価値とする小説なのだから。「クレール・ルノワール」においては、現実と妄想の境目、現実と非現実の境目、本当と嘘の境目である真実そのものが無効にされてしまう。すべてが可能な物語世界は、その内にあるものにとって、悪夢であり得る。ここで真実を探ず者は、迷路で踏み迷うしかないのである。読者はこの真実のない世界で自ら考えることだけを要求されている。

「クレール・ルノワール」は真実の価値に依拠しない小説である。かといって、

92) *Ibid.*, pp.145-146. 傍点部は原文ではイタリック体、〈 〉内の語は語頭大文字。

フロベールの作品のように、形式美を主張できる作品でもない。ヴィリエはしばしばフロベールと比較されるが<sup>93)</sup>、「クレール・ルノワール」はグロテスクな小説であり<sup>94)</sup>、その形式的ないびつさは常々指摘されてきた<sup>95)</sup>。むしろ、娯楽的価値を持った作品でもない。これは、『文学と芸術誌』掲載時に付けられたわき見出しが示すように、「陰鬱な物語 (histoire morose)」なのだ。「クレール・ルノワール」は、真実の価値にも、美の価値にも、娯楽的価値にも依拠しない。その価値はただ読者の安心を奪い、読者に考えることを強いる点にある。そういう意味において、これは読者にとって残酷な小説であり、『残酷物語』(Contes cruels, 1883) の出発点といえる作品なのである。

### 3) 結論

ヴィリエの最初の短編小説として、1867年に、まさにフランスにおける自然主義の台頭と時期を同じくして発表された「クレール・ルノワール」は、対リアリズム的に偽リアリズム小説として作られながら、存在論的転說法によって、現実 (le réel) と空想 (l'imaginaire) の境界を最終的に無効にしてしまう、反リアリズム小説であった。リアリズムを模しながら、リアリズムを否定するこの形式は、ヴィリエによって戯曲にも応用されることとなり、1870年上演、1871年出版の戯曲『反抗』(La Révolte)につながる。『反抗』は当時流行のリアリズム演劇の手法を用いながら、ブルジョワ演劇とは逆に、観客を決して安心させないという点において、「クレール・ルノワール」と同じ系譜に属するものである<sup>96)</sup>。しかし、「クレール・ルノワール」と『反抗』では、小説と戯曲というジャンルの

93) この点に関しては、以下を参照。Alan Raitt, «Villiers de l'Isle-Adam et Flaubert», *Villiers de l'Isle-Adam cent ans après (1889-1989)*, SEDES, pp.73-83.

94) この点に関しては、以下を参照。Nicole Taillade, «Claire Lenoir et le grotesque», *Annales*, Université de Toulouse-Le Mirail, IX, 1973, pp.43-67.

95) 多くの研究書や解説が「クレール・ルノワール」の様々な欠点を指摘している。プレイヤッド版全集の編者もまた、「『クレール・ルノワール』は、そのいくつもの欠点にもかかわらず、豊穡な作品」とみなしている (O.C., II, p.1139)。

96) この点はプレイヤッド版全集の編者によって、明確に指摘されている (*Ibid.*, I, p.1137)。

違いがあり、前者で確認した手法が、後者においても適用可能であるとは限らない。『反抗』における反リアリズムの手法は別に検討する必要があるだろう。

一方、小説というジャンルにおいては、「クレール・ルノワール」は間違いなく、ヴィリエの後の小説の先鞭を付けるものであろう。これは、「陰鬱な物語Ⅱ」として、『文学と芸術誌』に連載され、後に改稿されて『残酷物語』に収録された「予兆」のみならず、『残酷物語』所収の諸作品、さらにはその後の短編小説や、長編小説『未来のイヴ』まで含めてである。むろん、ヴィリエのすべての小説が、「クレール・ルノワール」の延長線上に、同じ手法を用い、同程度の強度で存在しているとは考えにくい。それでも、ヴィリエの多くの小説が、何らかの手法で、読者に考えることを強いるものであることは、まず間違いないであろう。「クレール・ルノワール」において初めて実践された「考えさせる」というスローガンは、ヴィリエにおいて小説執筆の倫理として機能しているように思われる。しかし、この点は、「クレール・ルノワール」以外の作品も個別に検討してみる必要があり、今後の課題としたい。

「クレール・ルノワール」では反リアリズムと転説法が密接に結びついていたが、ヴィリエには他にも転説法の使用が認められる作品があり、そのうちには、反リアリズムと転説法の使用が結びついているものもある。また、転説法とは異なる反リアリズムの手法というものもあるはずである。こうした問題の検討はすべて今後の課題である。

ヴィリエはまさにリアリズム・自然主義小説の全盛期に、そのリアリズム・自然主義小説に異議申し立てするような小説を執筆していた。しかしながら、ヴィリエは当時の読者には十分理解されなかったし、21世紀の現代においてもなお、その価値を十分に認められているとは言い難い、異端の作家である。それは、「クレール・ルノワール」の分析からはっきりわかるように、ヴィリエが真実の価値にも、美の価値にも、いわんや娯楽的価値にも依拠することのない、したがって、通常の価値観からすれば、訳のわからない小説を書いていたからだろう。そして、ヴィリエを師と仰いだ象徴派の作家たちも、ヴィリエの価値をどの程度まで理解していたかは疑問に思える。というのも、たとえば「クレール・ルノ

ワール」を単なるイデアリズムの書として読み、そこに観念論的な真実を探せば、早晩迷路に踏み込むか、ありきたりの答えしか受け取れないからである<sup>97)</sup>。ヴィリエは当時から、まじめなのか、ふざけているのかわからない作家とみなされていたようだが<sup>98)</sup>、この点はいまや否定的に捉えるべきではないだろう。ヴィリエは教えを垂れる作家ではなく、考えさせる作家なのである。価値観の相対化が進み、各人が自ら考えることがますます重要となっている今日、ヴィリエは再評価されるべき作家であろう。とりわけ、現実感の喪失が言われる現代日本においては、再読の価値のある作家ではなかろうか。

---

97) 「クレール・ルノワール」の典拠を綿密に研究したエミール・ドゥルガールはたとえばヘーゲル哲学に関するヴィリエの知識が、A・ヴェラによる入門書に目を通した程度のもに留まっていた可能性を示唆している (*L.T.P.C.*, II, p.112)。

98) たとえば、テオドール・ド・ヴィズヴァは、先に言及したヴィリエに関する1866年の論考で、ヴィリエの不人気を以下のように説明している。「教養ある読者のうちのエリートは、構成され、形の定まったものをあまりに好むので、均衡を欠いており、終わりのない余談が散りばめられ、皮肉 (*ironique*) なのか、まじめなのか決してわからない作品を評価できない」、(Theodor de Wyzewa, *op.cit.*, p.260)。